

次なる戦いに向かって進め その3

ここまでも、いろいろあった道筋だった。

一昨年(2019年)の7月の13日に、1点差負けで前々チームの戦いが終了してから、夏休みの毎日を練習に明け暮れ、新チームが戦いを打開する手立てを見出し、何とか県のベスト8に入り、日大東北との激戦を0-1で敗れたが、国体記念の大会で、0-10からの奇跡的な逆転で勝利し、チームは、優勝を経験できた。

年が明け、春先から故障者が続出し、春の県大会で敗退したのち、夏の大会までチーム事情は様々に色変わりし、迎えた初戦で0-6から追いかけたものの、二年連続満塁ホームランを打ちながら敗れるという現実遭遇した。

また長い夏がやってきた。今の1・2年生が、とにかく走り、打ち、捕っては投げる日々が、毎日毎日、とめどもなく続いていった。何が自分の価値を高めるのか、何が自分たちの存在意義を見出すのかは明らかだった。今の現状を超えていくことが求められていることはわかっていた。

レギュラーがそろわなくともなんとか地区大会は優勝できた。県大会も接戦のものにしながらベスト4に上ってはみた。

しかし、思いもかけず、ファーストの前でバウンドしたボールは頭上高く跳ね上がり、逆転のランナーがホームを駆け抜けていた。

3位決定戦は、雨を予感させる肌寒い因縁の白河グリーンスタジアムの3塁側だった。そして因縁の東日大付属昌平が相手となった。

少しずつ展開はこちら側にあったが、じりじりと並ばれる手前まで行った。4番の打球は、センターのフェンスの手前ぎりぎりまで飛んだ。フェンスについていたセンターがキャッチした。

9回の裏のスリーアウトまで、皆が昨日の教訓を胸に、グラウンドの隅々をスパイクや手でならしてゲームに臨んだ。ストライクのボールを岩間がキャッチした時、次への戦いはまた始まった。

岩手での1回戦は、6-0だったが、最後のノーアウト満塁をしのぎ切った。全員が一つになっていた。

折しも、強大な台風が東北に近づいていた。大会は、2日間延期になった。

いわきに戻り、10月12日の夜をそれぞれが迎えていた。様々な憶測の中で、好間・平窪地区が水没した。自宅が建つすぐ脇まで水は忍び寄ってきたチームメイトもいた。山側を回ってこない、学校まで届かないチームメイトがいた。電車も高速も止まったままだった。13日の昼過ぎには水道もちょろちょろとなり、すぐに出なくなつた地区もあった。(続く)